

高校英文法の参考書に望むこと —助動詞shallとshouldの記載内容について—

鵜崎 敏彦

日本獣医生命科学大学 英語学教室

要約

本稿では、鵜崎（2022）で示した、高校英文法の参考書には、仮定法の帰結節では1人称主語の場合に should が would と同義で用いられることがある、shall には「単純未来」の用法がある、shall の過去形は should である、という3点を記載して、学習者が受容の知識として活用できるようにして欲しい、という提言の妥当性を検証するために、高校英文法の参考書12冊の記載内容を調査した。その結果、高校生を主対象とした英文法の参考書6冊では、高校生から英語教員まで幅広い層を対象とした本格的な英文法の参考書6冊と比較すると、上述の3点の記載率が低下する傾向にあり、特に、shall には「単純未来」の用法があるという点の記載率の低下が著しいことが分かり、改めて鵜崎（2022）の提言を筆者の提言とした。

キーワード：助動詞 shall, 助動詞 should, 1人称主語, 単純未来, 仮定法帰結節

1. はじめに

野村（2022）では、仮定法の初習段階で学ぶ次の(1)の公式のshouldが、誤って義務の意に解釈されることがしばしばあることに注意喚起をしている。

(1) If S_1 + 過去形/were～, S_2 + {would, should, could, might} + 動詞の原形～.

(もし S_1 が～したら／～だったら, S_2 は{～するだろう, ～できるだろう, ～かもしれないだろう})

そして、最後のまとめとして、次の(2)の提言を記している。

(2) 受容の知識として、主語が1人称のI/weの場合、仮定法の帰結節に should が現れることがあり、その場合、would と同様の意で、義務の意味はないことを英語教員や学習の進んだ生徒は理解しておくべきである。 (野村 2022: 71)

筆者は、鵜崎（2022）において、野村（2022）の(2)の提言に同感であると記した。そ

の上で、初習段階では助動詞 **should** は「～すべきだ」という意味で義務を表すと教わっているはずの学習者が、仮定法の帰結節に現れる **should** を誤って義務の意味に解釈することがしばしばあるのは仕方のないことであると述べた。続いて、1 人称主語の「単純未来」に **shall** が使われることがあることと、**shall** の過去形は **should** であることを学習者が知識として持っていれば、仮定法の帰結節に現れる **should** は「単純未来」を表す **shall** の仮定法過去形であることを容易に理解できるのではないかと指摘し、次の(3)を筆者の提言として示した。

- (3) 高校英文法の参考書には、注としての記載でも構わないので、仮定法の帰結節では 1 人称主語の場合に **should** が **would** と同義で用いられることがあることに加え、**shall** に「単純未来」の用法があることと、**shall** の過去形は **should** であることも記載していただき、学習者が受容の知識として活用できるようにしていただきたい。

(鵜崎 2022: 71)

そこで、本稿では、(3)の提言の妥当性を検証するために、高校英文法の参考書では(3)で示した内容が実際にどの程度記載されているのかを調査することにする。

2. 調査方法

今回の調査では、手元にある高校英文法の参考書の中から現在出版されている 12 冊を選び、それら 12 冊を、高校生から英語教員まで幅広い層を対象とした本格的な英文法の参考書 6 冊と、高校生を主対象とした英文法の参考書 6 冊とに分類し¹⁾、次の(4a-c)の 3 点が実際にどの程度記載されているのかを調べてみることにする。

- (4) a. 1 人称主語の「単純未来」に **shall** が使われることがある。
 b. **shall** の過去形は **should** である。
 c. 仮定法の帰結節では 1 人称主語の場合に **should** が **would** と同義で用いられることがある。

本稿で調査対象とした高校生から英語教員まで幅広い層を対象とした本格的な英文法の参考書は、『英文法解説』[改訂三版] (金子書房)、『英文法総覧』[大改訂新版] (開拓社)、『ロイヤル英文法』[改訂新版] (旺文社)、『表現のための実践ロイヤル英文法』(旺文社) (以下、『実践ロイヤル英文法』)、『表現英文法』[増補改訂第 2 版] (コスモピア)、『基礎と完成 新英文法』[新装版] (開拓社) の 6 冊で、高校生を主対象とした英文法の参考書は、『キク英文法』(アルク)、『一億人の英文法』(ナガセ)、『総合英語 One』(アルク)、『総合英語 Evergreen』(いっずな書店)、『ジーニアス総合英語』[第 2 版] (大修館書店)、

『総合英語 FACTBOOK これからの英文法』[NEW EDITION] (桐原書店) (以下、『総合英語 FACTBOOK』) の 6 冊である。

(4a-c)の 3 点の記載に関しては、注や参考としての扱いも含め、(4a-c)の内容が明記されている場合、扱われてはいるが(4a-c)の内容の全てが記載されていない場合、記載されていない場合、の 3 つに分けて調査することにする。

3. 調査結果

3.1 本格的な英文法の参考書の調査結果

先ず始めに、高校生から英語教員まで幅広い層を対象とした本格的な英文法の参考書 6 冊を調べてみた。その結果を一覧にまとめたものが次の表 1 である。なお、注や参考としての扱いも含め、(4a-c)の内容が明記されている場合は「有」、扱われてはいるが(4a-c)の内容の全てが記載されていない場合は「(有)」, 記載されていない場合は「無」と表記してある。

表 1 : 本格的な英文法の参考書

	(4a)	(4b)	(4c)
『英文法解説』	有	無	(有)
『英文法総覧』	有	有	(有)
『ロイヤル英文法』	有	有	(有)
『実践ロイヤル英文法』	有	有	(有)
『表現英文法』	(有)	有	無
『基礎と完成 新英文法』	有	有	(有)

(4a)に関して、『英文法解説』では、イギリス英語では 1 人称に shall も使われるとの説明があり、次の(5a-c)の例文が挙げられている²。

(5) a. I will be seventeen next birthday. (次の誕生日に 17 歳になります)

Cf. I shall be seventeen next birthday. 《英》

b. Will I need a sweater? (セーターが必要だろうか)

Cf. Shall I need a sweater? 《英》

c. Will you be free tomorrow? (あしたはお暇ですか)

Cf. Shall you be free tomorrow? 《英》

(『英文法解説』: 214-215) ³

『英文法総覧』では、主としてイギリス英語の用法とされることがあったが、現在では、イギリス英語であっても will を用いることが多く、shall は堅い形式的な用法に限られる

ようになってきているとの説明があり、次の(6a-c)の例文が挙げられている。

(6) a. I shall have more time next week.

(来週になればもう少し時間が取れそうに思えます)

b. I hope we shall meet again.

((別れ際に) いつかまた会えるといいですね)

c. We shall set out at two o'clock.

(私たちは2時に出発することになっております)

(『英文法総覧』: 237)

『ロイヤル英文法』と『実践ロイヤル英文法』では、それぞれ次の(7a, b)と(8)のように、1人称主語の will の例文の注釈として、shall の説明が付け加えられている。

(7) a. I will be sixteen next birthday. (今度の誕生日で16になります)

* 改まった言い方、特に《英》では I shall ... も用いるが、日常的には I'll ... と短縮されることが多いので、will か shall かはあまり気にする必要はない。

b. Will I arrive there before it gets dark? (暗くなる前にそこへ着けるでしょうか)

* 《英》では Shall I ... ? も用いる。 (『ロイヤル英文法』: 415)

(8) I will be 20 next Sunday. (私は今度の日曜日で20歳になります)

● 1人称で shall を使うのは、《英》でも古風な、堅い言い方。

(『実践ロイヤル英文法』: 59)

『表現英文法』では、未来表現の項目の〈will+完了形〉の説明のところで、1人称主語の場合は、will have done の will を shall で表現することが可能(ただし、英国用法)であり、次の(9a, b)の2例はほぼ同義であるとの記載がある。

(9) a. I will have reached home before June 13th.

b. I shall have reached home before June 13th.

(『表現英文法』: 214)

『基礎と完成 新英文法』では、「未来時を示す表現形式」の章の〈will/shall+動詞の原形〉の説明のところで、次の(10)の例を挙げており、「助動詞」の章の〈shall の意味・用法〉の説明のところでも、次の(11a, b)の例が挙げられていて、主に《英》で I/We shall の形で用いられるとの記載がある。

(10) 《英》 I shall/《米》 I will be rich one day. (いつか金持ちになるだろう)

(『基礎と完成 新英文法』: 86)

(11) a. One day we shall die. (われわれは、いつか(きっと)死ぬ)

b. I shall [〈口語〉will] be nineteen in a week's time.

(私は1週間したら19歳になります)

(『基礎と完成 新英文法』: 141)

(4b)に関しては、表1で挙げた6冊の参考書の内、『英文法解説』を除く5冊において記載があった。『表現英文法』では、助動詞 should の説明で should は shall の過去形であることが明記されており、その他の4冊では、助動詞の一覧表の中で shall の過去形は should であることが記載されていた。

(4c)に関して、『英文法解説』と『実践ロイヤル英文法』では、(1)で示した公式と同様に、should は公式の中に含まれているが、should は1人称主語の場合に would と同義で用いられるとの説明は記されておらず、should の例文も挙げられていない。

『英文法総覧』では、公式における帰結節の助動詞は「would, could, might, etc.」と記されているが、続く解説には should も含まれており、1人称主語に関する説明は無いものの、次の(12)の例文が挙げられている。

(12) Had he not told me about it, I should never have known the facts.

(もし彼がそのことについて話してくれなかったら、ぼくはその事実を知るに至らなかったであろう)

(『英文法総覧』: 458)

『ロイヤル英文法』では、公式の帰結節は〈過去形助動詞＋原形不定詞/完了不定詞〉とのみ表記されており、次の(13)の例文が挙げられている。

(13) If I had been sensible, I should have known I had no chance.

(もし私が賢明だったら、私に勝ち目がないことがわかっただろう)

(『ロイヤル英文法』: 551)

『基礎と完成 新英文法』では、should は公式の中に含まれているが、続く説明では「would, should, could などの選択は、主語の人称、および文の意味に応じてなされる」とのみ記載されている。1人称主語で should が用いられている例文として次の(14a-d)の4例が挙げられているが、1人称主語に関する説明は明記されていない。

(14) a. I should [would] be grateful if you would do that for me.

(それをしていただけますなら、ありがたいことですが)

b. If he were in this town, I should have met him before this.

(もし彼がこの町にいれば、これまでに会っているはずだが)

c. But for [Without/If it were not for] your advice, I should fail.

(あなたの助言がなければ、私は失敗するでしょう)

d. But for [Without/If it had not been for] your advice, I should have failed.

(あなたの助言がなかったならば、私は失敗していたでしょう)

(『基礎と完成 新英文法』: 418-422)

表1で挙げた6冊の参考書の内、『表現英文法』を除く5冊においては、(4a)の内容が明記されているので、仮定法の項目での1人称主語に関する説明は必要ないかもしれないが、記載があった方がより親切であろう。

以上の調査結果から、表1で挙げたような本格的な英文法の参考書では、(4a-c)の内容に関する記載率は高い傾向にあると言ってよいだろう。

3.2 高校生を主対象とした英文法の参考書の調査結果

続いて、高校生を主対象とした英文法の参考書6冊を調べてみた。その結果を一覧にまとめたものが次の表2である。

表2：高校生を主対象とした英文法の参考書

	(4a)	(4b)	(4c)
『キク英文法』	(有)	有	無
『一億人の英文法』	無	有	無
『総合英語 One』	無	無	有
『総合英語 Evergreen』	無	無	有
『ジーニアス総合英語』	無	無	有
『総合英語 FACTBOOK』	無	有	無

(4a)に関して、『キク英文法』では、助動詞の項目で shall の現在形の意味が「～でしょう」と記載されていることから、「単純未来」に使われると推測できるので「(有)」としたが、1人称主語の「単純未来」に shall が使われることがあるとは明記されていない。

(4b)に関して、『キク英文法』では、助動詞の項目で shall の現在形の意味の後ろに括弧付けで「過去形は should」との記載がある。『一億人の英文法』では助動詞 should の冒頭の説明で、『総合英語 FACTBOOK』では助動詞 shall の説明文にある Tea Break で、should は shall の過去形から独立した助動詞であると記載されている。

(4c)に関して、『総合英語 One』では、公式における帰結節の助動詞は would, could,

might のみだが、注の扱いではあるものの、次の(15)の例文を挙げて、1 人称主語のときに should (～だろう) を使うこともあるが、主にイギリス英語の用法であると詳しく説明している。

(15) If I were you, I should not do it.

(もし私があなただったら、それはしないだろう)

(『総合英語 One』: 366)

『総合英語 Evergreen』でも、『総合英語 One』と同様、公式における帰結節の助動詞は would, could, might のみだが、参考という扱いで、次の(16)の例文を挙げて、1 人称主語のときには should も使うことができると説明している。

(16) If I had wings, I should fly to you.

(もし私に翼があれば、君のところに飛んでいくのだが)

(『総合英語 Evergreen』: 368)

『ジーニアス総合英語』では、公式における帰結節の助動詞は would, could, might のみで、should の例文は挙げられていないが、注の扱いで、イギリス英語では 1 人称主語のときに would の代わりに should を使うこともあると明記されている。

予想通りではあるが、表 2 で挙げたような高校生を主対象とした参考書では、表 1 で挙げた 6 冊の本格的な英文法の参考書と比較すると、(4a-c)の内容の記載率が低下する傾向にあることが分かった。特に、(4a)の内容に関する記載率の低下が著しいと言える。

4 まとめ

本稿では、鵜崎 (2022) で示した(3)の提言の妥当性を検証するために、高校英文法の参考書の中から 12 冊を選び、それらを高校生から英語教員まで幅広い層を対象とした本格的な参考書 6 冊と、高校生を主対象とした参考書 6 冊とにグループ分けし、(4a-c)の 3 点が実際にどの程度記載されているのかを調べてみた。その結果、高校生を主対象とした英文法の参考書では、本格的な英文法の参考書と比較すると、(4a-c)の内容の記載率が低下する傾向にあり、特に、(4a)の内容に関する記載率の低下が著しいことが分かった。

鵜崎 (2022) でも紹介されているが、(4a)の 1 人称主語における「単純未来」の shall の使用に関して、『オーレックス英和辞典』[第 2 版] (旺文社) は、shall の項の PLANET BOARD というコーナーの中で、次の(17a, b)の例を挙げて、その使用率を調査した結果を掲載している。

(17) a. I shall be seventeen next month.

b. I will be seventeen next month.

(『オーレックス英和辞典』: shall の項)

同辞書には、米国用法では(17b)の will のみを使うという人が 82%で圧倒的に多く、英国用法でも(17b)のみを使うという人が 52%で最も多いものの、(17a, b)の両方を使うという人も米国用法で 16%、英国用法では 40%いたと記載されている。この調査結果からも、1 人称主語の「単純未来」に shall が使われる例を学習者が目にする可能性はあると言えるだろう。

(4a-c)の内容は、アウトプットのための知識としては必要ないのはもちろんだが、学習者が受容の知識として活用できるように、改めて(18)(=3))を筆者の提言としたい。

(18) 高校英文法の参考書には、注としての記載でも構わないので、仮定法の帰結節では 1 人称主語の場合に should が would と同義で用いられることがあることに加え、shall に「単純未来」の用法があることと、shall の過去形は should であることも記載していただき、学習者が受容の知識として活用できるようにしていただきたい。
(=3))

5 注

1. 今回の調査では、「はしがき」、「はじめに」、「書評」などの中で、高校生程度以上の英語学習者から英語を専門に教授している人まで幅広い層を対象としている、といった内容の記載がある参考書を、高校生から英語教員まで幅広い層を対象とした本格的な英文法の参考書として分類している。
2. 本稿では、英文法の参考書と辞書の例文を引用する際に、原典で施されていた太字や斜体は全て外して引用している。
3. 『英文法解説』では、解説という扱いで、単純未来の shall に関して次の説明を付け加えている。

「《英》でも will が次第に優勢になってきたが、《米》では 1 人称の単純未来に shall を絶対に使わないかということ、そうも断言できない。やや改まった文体では使われることがある」
(『英文法解説』: 215)

4. 野村(2022: 71)でも、英作文の知識としては、仮定法の帰結節に現れる助動詞として全人称に対して使用できる would, could, might のみを教えればよいとの提言が示されている。

6 引用文献

安藤貞雄(2021)『基礎と完成 新英文法』[新装版] 開拓社.
江川泰一郎(1991)『英文法解説』[改訂三版] 金子書房.

- 大西泰斗・ポール・マクベイ (2011)『一億人の英文法』東進ブックス.
- 大西泰斗・ポール・マクベイ (2022)『総合英語 FACTBOOK これからの英文法』[NEW EDITION] 桐原書店.
- 塙タカユキ編著 (2017)『総合英語 Evergreen』いっずな書店.
- 金谷憲総合監修 (2014)『総合英語 One』アルク.
- 田中茂範 (2017)『表現英文法』[増補改訂第2版] コスモピア.
- 鵜崎敏彦 (2022)「本誌1月号の野村忠央先生の『投稿』を読んで ～高校英文法の参考書に望むこと～」『英語教育』2022年3月号 p.71 大修館書店.
- 中邑光男・山岡憲史・柏野健次 (2022)『ジーニアス総合英語』[第2版] 大修館書店.
- 野村恵造・花本金吾・林龍次郎編 (2013)『オーレックス英和辞典』[第2版] 旺文社.
- 野村忠央 (2022)「仮定法の帰結節に現れる should について」『英語教育』2022年1月号 pp.70-71 大修館書店.
- 一杉武史 (2007)『キク英文法』アルク.
- 安井稔・安井泉 (2022)『英文法総覧』[大改訂新版] 開拓社.
- 綿貫陽・マーク・ピーターセン (2011)『表現のための実践ロイヤル英文法』旺文社.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘 (2000)『ロイヤル英文法』[改訂新版] 旺文社.